



岩の大きさ、森の深さが、水の強さを語る。  
この支流の源頭は、槍の前衛、笠ガ岳(2,898  
m)。流れが澄みすぎて、釣りは難しい



高原川に行くと、わたしはたいてい尺モノを釣るのだが(正確には釣れるまで帰らないのだが)、今回はこの9寸たらずのイワナのみ

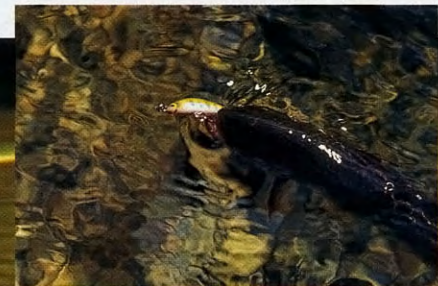
「グラフィ紀行」

# 飛驒・高原川につむぐ夢

なぜか心をひきつけられる溪流がある。いい釣りができたから、水がきれいだからと理由はいくつもつけられるのだが、つまるところただ自分が惚れこんでいるから。女に惚れるのと大差はない。その溪流に通うだれもが、自分がいちばん惚れこんでいると思ひこむところも似ている。すると、以下は告白のようなものだ。

文= TOKO  
Text by TOKO  
写真= 滝口 保  
Photo by Takiguchi Tamotsu





鼻曲がりの大アマゴの記憶が、つい金色を選ばせる

とはいえわたしは、下流部はシーズンを通じてミノーを使う。リップを選ぶことで、瀬でも淵でも通用し、川を立体的に攻められる

# そこには 自然力が 充ちている

テントを張り終えると瀬音に気づいた。魚がいるかどうかはわからなかったが、クマザサを分け、沢に降りた。「ここから、あの淵にそっと近づき、道糸を張ったまま、流れと同じ速さでエサを流せ」と友は言った。淵といってもひとまたぎの幅しかない。

……流れていた目印が止まり、不審さに竿を立てて訊く。生命!? 逸走、感電。頭上のボサも構わず竿をおおると、そいつは1個の金色の光となって水面を割り、へびの

ようにのたうちながら跳んできた。エラを開け、ばくばくと息をしているをいつを押さえると影、振り向くと友。

「イワナだよ、成魚放流モノじゃねえな」測ると265mmあった。それがわたしの溪流釣り初体験の、うそじゃない、第1投だった。そこが高原川だった。

それが'92年8月の、たしかお盆過ぎ。初体験にして絶頂感を知ってしまったわたしが、高原川に通うようになった

の言うまでもない。もう20回近くは通い——釣行回数は少ないが、行けば少なくとも2泊、長ければ5泊する——、生まれて初めて見、触った金色の野生を得たことが、高原川に合流する多数の支流のひとつの、そこに落ちる無数の沢のひとつであり、そこは高原川という性体験の、あ、誤変換、生態圏の毛細血管のはしっこに過ぎなかった、ということをおたしは知った。

## ——高原川

富山湾にそそぐ神通川の上流。河口から55km上流に人口3万の神岡市があり、その上流が(一般的には)溪流釣りのフィールドとなる。

数々の支流は、黒部五郎岳、槍ヶ岳、穂高岳など、北アルプスの主峰を源頭とし、水勢は強く複雑だ。

高原川は秘境ではない。国道に沿って流れる本流は、ヒト臭い採石場や田畑や民家の中にあり、溪流釣りの世界では有名で、雑誌などでさんざん紹介されている。

例によって、野田さんに怒ってもらいたいような無意味破壊的公共工事も多い。微に入り細にわたり告発したいが紙数がない。

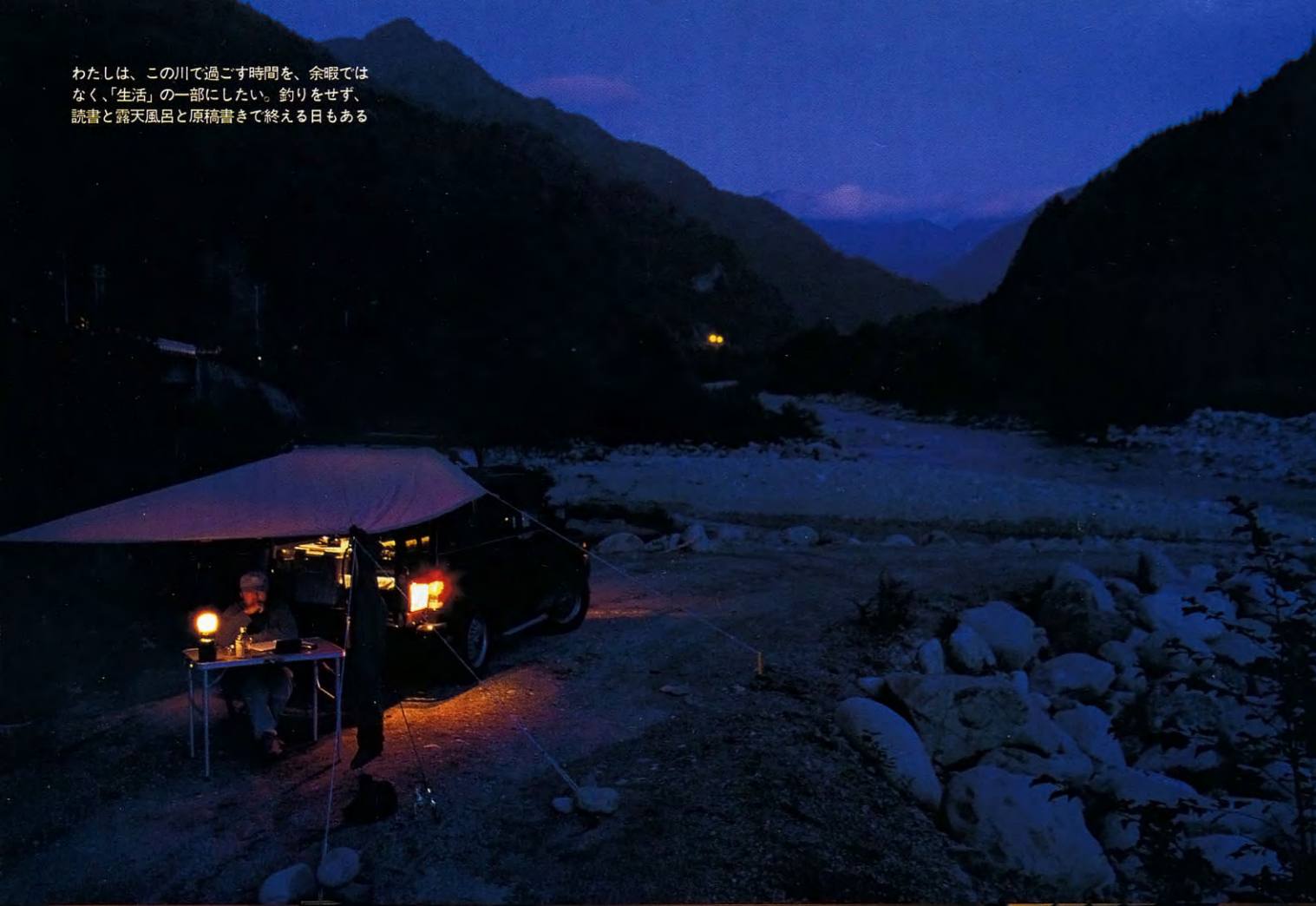
破壊が著しいその本流筋でさえし、河岸の巨岩や中州の植生など、自然力を感じさせる。

そう、なぜ高原川なのか? 第一の魅力は溪流魚の美しさと大きさだ。'96年の5月には本流筋随一のポイント

簡単には釣らせてくれないが、朝と夕にはチェックせずにはいられないポイント。ほかのどこより、割れてはじけ漂う水に充たされている



わたしは、この川で過ごす時間を、余暇ではなく、「生活」の一部にしたい。釣りをせず、読書と露天風呂と原稿書きで終える日もある



基本的に宿を使わずクルマで眠る。宿の場所やメンの時間に縛られたいはない。今宵は何を食い、どこで眠ろうか、と悩むのも楽し

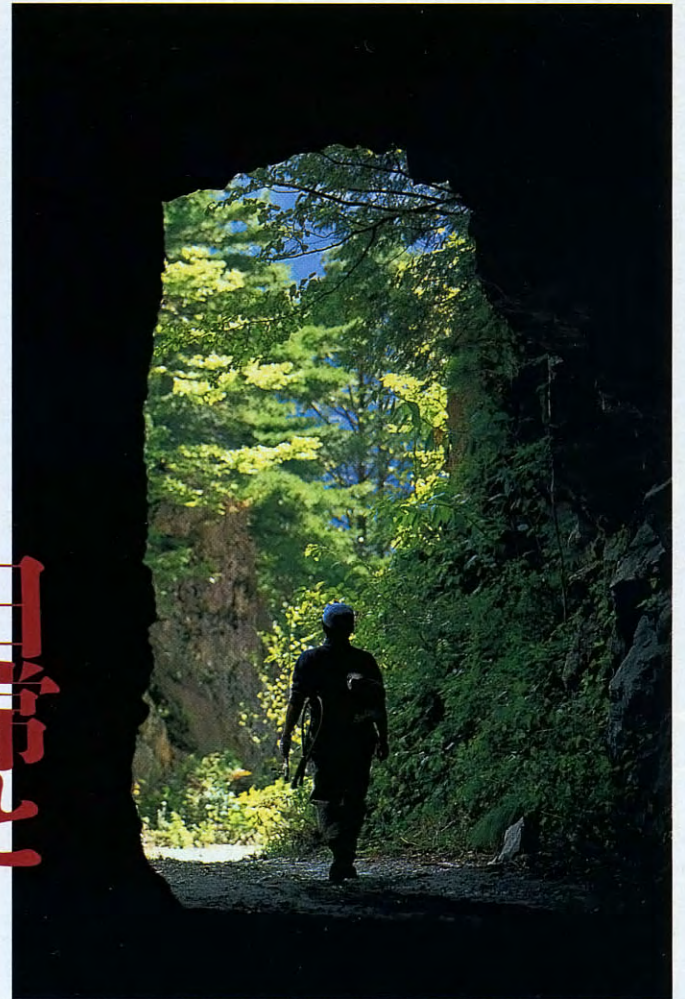


この峠から、ラーメンがうまいドライブインまで10分、ISDN電話機のある町まで40分



ソロか、ふたりのキャンプなら七輪に限る。仕事が早く、河原を汚さず、どこか優しい

# 日常と非常日常のはざままで



朝まずめの釣りを終え、林道を下る時間が好きだ。晴れていれば、釣れていれば、なお

ト、支流双六川との出会いで、地元の人ルアー師が、57cmを頭に20尾の尺上30cm以上のイワナを釣った。湖ではともかく、川でそれだけのサイズが釣れるのは珍しく、大物はヒレやエラが乱れがちなのだが、高原川のそれは流れに洗われた野性美に充ちている。

神岡の釣り具屋の親父さんによれば、昭和20年代、まだダムがなかったころはここまでサクラマスが遡り、尺アユもいたそう。

漁協の放流量も多いのだが、川の生産力が大きい。北アルプスの雪代を集める流量や、自然林の伐採は進んでいないといえいまだ深い森が、放流された発眼卵や稚魚の自然繁殖を促している。

第二の魅力は、言葉よりも写真が雄弁に語っている、支流群の峪の深さ、水の清さ……。

わたしの秘密のポイントとは、支流に沿って延びる林道をクルマで5分ほど登り、その支流から分かれる沢沿いの袖道を15分登った所にある。

林道には、名前は知らない、大きなアゲハチョウが乱舞し、そま道は崖といていい急斜面の山腹に切られているのだが、その幅30cmの袖道にカモシカがいて、立ち去ってくれずに立ち往生したり、峪を渡る野猿の群れに囲まれて凍ることもしばしばである。

支流の上流部の多くは、三ツ道具がないと通れないほど険しいが、下流部は歩くのにそれほど難儀はせず、しかし苦むした巨岩や、胸まで埋まる下草など、自然力に充ちている。

人工物は目につかない、といえはうそになるが、それは見えなかったこと

にすればいいのだ。

第三に、高原川はコンビニエントだ。神岡には酒も買える24時間営業のコンビニがあり、NTTの支局と、わたしが確認しただけで2台のISDN公衆電話があるから、ブック・コンビニエータで仕事もできる(それが、わたしの滞在を延ばす理由でもあるのだ)。

そういう便利さと自然は背反するものだが、高原川ではなかなか共存しており、コンビニから森深い峪へ、峪からコンビニへと30分でワープできる。夜明けとともに大支流・双六との出会いや支流の大場所までミノーを投げ、40cmのアマゴ、50cmのイワナを狙う。日が高くなれば峪だ。

ルアー竿をテンカラ竿に持ち替え、林道を歩き、袖道を登り、沢に降り、毛バリを打ちながら遡り、探り、遡り。頭上のボサで、もはやテンカラは振れず、エサ竿に40cmのハリス、その先の毛バリで水面をたたくしかない小さなポイントからでも、尺上のイワナが出るから気が抜けない。

林道に上がりEPIガスでコーヒーを淹れる。

昼は、無名なのだが意外にうまい奥飛驒ラーメンを食う。

白昼は釣りにならないから、名物の露天風呂でゆつくりすればいいのに、あの瀬、あの淵と思いついて出されてじっとしてはられない。

飽きず、疲れず、森の奥、水の奥へとさまよひ、夕暮れの残光を追うようにクルマに戻って冷えたビールを流しこみ、神岡の居酒屋でビールをあおり、寝酒を飲みつつ仕掛けを準備し、あしたの夢を見ながら眠るのだ。